平泉

要旨

平泉を訪れて藤原氏三代の栄華の跡を、大門の跡や金鶏山にしのび、高館に登って、泰衡らの旧跡に往事を思い、義経主従の最期に思いをはせ、悠久な自然を前にして、人の営みのはかなさを痛感した。むなしい草むらとなるはずだった光堂が、鞘堂によって数百年の風雪に耐え、その姿を今にとどめていることに強く感動した。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P一〇三・12〈卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曽良〉	平泉の藤原氏三代の栄華ははかなく消え、大門の跡や金鶏山だけが残っているばかりである。高館に登って大観すると、泰衡らの旧跡が思われ、また、義経主従の最期のありさまも想像されて、自然の悠久さと人の営みのはかなさとが思い合わされ、涙を落とした。「夏草や」の句にその感慨を託したが、曽良も「卯の花に」の句に、彼の感慨を述べた。
第二	P一〇三・14〈かねて〉～終わり	以前から話に聞いていた経堂と光堂を拝観したが、鞘堂によって守られ、数百年の風雪に耐えた光堂を、今、目の当たりにできて感動し、その思いを「五月雨の」の句によって述べた。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①三代（さんだい）の　栄耀（えいよう）一睡（いっすい）の　うちに　して、　大門（だいもん）の　跡（あと）
格助・体修　断・用　接助・単接　格助・体修

は　一里（いちり）こなた　に　あり。　②秀衡（ひでひら）が　跡（あと）は　田野（でんや）に
係助・区別　代　格助・場所　ラ変・終　格助・体修　係助・区別　格助・変化

なり　て、　金鶏山（きんけいざん）のみ　形（かたち）を　残す。　③まづ　高館（たかだち）に　登れ
ラ四・用　接助・単接　副助・限定　格助・対象　サ四・終　副　格助・帰着　ラ四・已

ば、　北上川（きたかみがは）南部（なんぶ）より　流るる（ながるる）大河（たいが）なり。　④衣川（ころもがは）は　和泉が城（いづみじやう）
接助・順偶　格助・起点　ラ下二・体　断・終　係助・区別

を　巡り（めぐり）て、　高館（たかだち）の　下（もと）にて　大河（たいが）に　落ち入る。
格助・経場　ラ四・用　接助・単接　格助・体修　格助・場所　格助・帰着　ラ四・終

⑤泰衡（やすひら）ら　が　旧跡（きうせき）は、　衣が関（ころもがせき）を　隔て　て　南部口（なんぶぐち）
格助・体修　係助・区別　格助・対象　タ下二・用　接助・単接

を　さし固め（かため）、　夷（えぞ）を　防ぐ（ふせぐ）と　見え（み）たり。　⑥さても　義臣（ぎしん）
格助・対象　マ下二・用　格助・対象　ガ四・終　格助・引用　ヤ下二・用　存・終　接

すぐつ　て　この　城（しろ）に　籠もり（こもり）、　功名（こうみやう）一時（いちじ）の　叢（くさむら）
ラ四・用(促音)　接助・単接　代　格助・体修　格助・場所　ラ四・用　格助・体修

と　なる。　⑦「国（くに）　破れ（やぶれ）て　山河（さんが）あり、　城（しろ）春（はる）に　して　草（くさ）
格助・変化　ラ四・終　ラ下二・用　接助・単接　ラ変・終　断・用　接助・単接

青み（あを）　たり。」　と　笠（かさ）うち敷き（しき）て、　時（とき）の　移る（うつる）まで　涙（なみだ）
マ四・用　存・終　格助・引用　カ四・用　接助・単接　格助・主格　ラ四・体　副助・範囲

を　落とし（おとし）　侍り（はべり）　ぬ。
格助・対象　サ四・用　補動・ラ変・用(丁)語り手→読み手　完・終

①藤原氏三代の輝かしい栄えも一睡の夢のようにはかなく消えて（今は廃墟になってしまった）、当時の表門の跡は一里ほど手前にある。②秀衡の（館の）跡は田や野になっていて（昔の面影はなく）、ただ金鶏山ばかりが（昔の）形を残している。③まず高館に登ってみると（眼下に北上川が見下ろされるが）、北上川は南部地方から流れてきている大河である。④衣川は和泉が城を巡って、高館の下でこの大河に流れ込んでいる。⑤泰衡らの旧跡は、衣が関を隔てて（向こうにあり）南部地方への出入り口を堅く守り、蝦夷（の侵入）を防ぐと見える。⑥それにしても（義経は）忠義の士たちをよりすぐってこの高館にたてこもり、功名（手柄を競って戦ったのだが、それ）も一時のことで（今ではその跡は茫々たる）草むらとなっている。⑦「国は乱れても山河だけは昔に変わらず残っている。都城は（荒廃しているが）春が訪れて草木だけは昔のとおり青々としていることよ。」と（杜甫の

⑧夏草や　兵どもが　夢の　跡
　間助・詠嘆　格助・体修　格助・体修

卯の花に　兼房見ゆる　白毛かな　曽良
　格助・場所　ヤ下二・体　終助・詠嘆

⑨かねて　耳驚かし　たる　二堂　開帳す。
　副　サ四・用　存・体　サ変・終

像を　残し、光堂は　三代の　棺を　納め、　三尊の　仏を　安置す。
　格助・対象　サ四・用　係助・区別　格助・体修　格助・対象　サ変・終

⑪七宝　散りうせて、　珠の　扉風の　破れ、金の　柱霜雪に　朽ちて、
　サ下二・用　接助・単接　格助・体修　格助・体修　格助・対象　サ変・終　格助・理由　タ上二・用　接助・単接

すでに　頽廃の　空虚の　叢と　なるべきを、　四面新たに　囲みて、
　副　格助・体修　格助・変化　ラ四・終　当・体　接助・逆確　形動ナリ・用　マ四・用　接助・単接

千歳の　蔓を　覆ひて　風雨を　しのぎ、しばらく　記念と　はなれり。
　格助・体修　格助・対象　ハ四・用　接助・単接　格助・対象　ガ四・用　副　格助・変化　係助・提示　ラ四・已　存・終

⑫五月雨の　降り残して　や　光堂
　格助・主格　サ四・用　接助・理由　係助・疑問

詩を思い出して共感し、）笠を敷いて（腰を下ろし）、いつまでも懐旧の涙を流したのであった。

⑧夏草や兵どもが夢の跡
　卯の花に兼房身ゆる白毛かな

⑨前々から話に聞いて（その立派さに）驚いていた（経堂・光堂の）二堂が開かれている。⑩経堂は（清衡・基衡・秀衡の）三代の将軍の像を残しており、光堂はこの三代の棺を納め、（阿弥陀・観音・勢至の）三尊の仏を安置している。⑪（かつては、柱などを華麗に飾っていた）さまざまな宝物も散りうせて、珠玉を散りばめた扉も（長い間の）風に傷んで、金箔を塗った柱も霜や雪のため朽ちて、もう少しでみな崩れ落ちて何もない草むらとなってしまうはずだったが、四方を（鞘堂を造って）新しく囲み、屋根に覆いをして風雨から守るようにして、（これで）しばらくの間は千年の昔をしのぶ記念（の建物）となって残ることになった。

⑫五月雨の降り残してや光堂

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 藤原氏三代の歴史、義経との関わりについて学ぶ。知技(1)ア・(2)イ

❷「平泉」を音読をする。思判表B(1)ア

❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ

→「言葉の学習」1

❹ 省略されている言葉を補いながら、段落ごとに現代語訳する。知技(1)エ 思判表B(1)ア

❺ 杜甫の漢詩「春望」の内容を理解し、そのような古典の引用が作者の心情をどう引き出しているか考える。知技(2)アエ 思判表B(1)エ

❻「夏草や」「卯の花に」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表B(1)イ

→「学習のポイント」1

❼ 作者が見た光堂・経堂の情景についてまとめ、時間の推移とともにどのような変化がみられたか話し合う。思判表B(1)エ

❽「五月雨の」の句に表現された作者の心情を理解する。思判表B(1)イ

❶奥州藤原氏の歴史と義経との関わりについては、前の時間に課題として生徒に与えて、発表させてもよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

❷省略を多くすることによって、文章に緊張感を生んでいることを、実際に音読することで気づかせたい。

【評価】俳文の文体の特徴を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名して音読させることにより、確認する。

❸「が」「の」などの助詞の用法を確認させたい。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❹第一段落の読解は、資料の地図（P一〇二）を使いながら、平泉の歴史も解説し、作者が目にしたものに対する詠嘆の気持ちをつかませる。第二段落は、自然の力から見れば「しばらく」ではあっても、人為の力によって平泉の威光がまだ残されてい

ることへの感慨であることを理解させたい。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・省略語を補って解釈し、踏まえられている古典の意味を理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❺「邯鄲の夢」の故事は辞書で生徒に調べさせる。「春望」（P一五二）の漢詩も参照する。引用された古典が意味することを押さえたら、引用文によって、作者はどのような感慨を表現しようとしたのか、生徒に問いかけたい。

【評価】 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解しているか、授業中の質問により、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、授業中の質問により、確認する。

・本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、作者の旅に対する心情を五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

❻作者の感慨を結晶化させた発句では、「夢の跡」の「夢」とは具体的に誰のどのような夢なのか、生徒にも考えさせたい。また二つの句はどのように持ち味が違うか、生徒に意見を述べさせてもおもしろい。

【評価】 季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

❼❽「曽良旅日記」から、当日は晴れていたこと、経堂は見ていないことなど、実際の旅の様子と異なっている点もあったことを紹介し、作者が事実を超えて表現しようとしたことをつかませるとよい。

❼**【評価】** 本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、段落ごとの作者の思いを五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

❽**【評価】** 季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

まとめと発展

学習活動のポイント

❶「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について、それぞれ調べさせる。主態
→「言語活動」1

❶資料集や図書館などを利用して、平泉の歴史的背景や義経との関わりを押さえて、作者が抱いた、時の流れと人の営みに対する詠嘆の気持ちをつかみ、芭蕉が句に込めた思いについて解釈させる。

【評価】進んで人生と旅についての作者の考えを理解し、俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味い、学習課題に沿って、「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について調べようとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●一〇三ページ

問　**「栄耀一睡のうちにして」（2行目）と「功名一時の叢となる。」（7行目）の表現に共通している点は何か。**

答　人生の栄華のはかなさ、むなしさを表している点。「一睡のうち」は中国の故事、盧生の「邯鄲の夢」から出た言葉で、「一炊」が正しいが、中世以降しばしば混同して用いられた。唐の盧生が趙の都の邯鄲で道士から枕を借りて寝たところ、立身出世して富貴の身となり、栄華を極めた夢を見たが、夢が覚めてみると、初め炊きかけてあった黄粱が、まだ十分に煮えていなかったほど短い時間のことであったという話による。人生の栄華のはかなさを例えた「黄粱一炊の夢」を踏まえた表現。「功名一時の叢となる」は、「功名手柄を争ったが、その功名も一時的なはかないもので、その当時の功名の場は、今は叢と化している」の意。

問　**「一睡」は、中国の故事を踏まえるなら、本来どのような漢字を当てるべきか。**

補答　一炊

「一睡」が本来「一炊」ということ、「一炊」が中国の故事より出ていることを理解させる。さらに「一炊」が取り入れられて、

語句の研究

●一〇三ページ

1平泉　岩手県の南部、西磐井郡内の地。北上川が貫流する。奥州藤原氏の拠点として栄えた。

2三代の栄耀　藤原清衡・基衡・秀衡三代の栄華。清衡は陸奥守経清の子で、陸奥押領使となり、嘉保元（一〇九四）年平泉に館を構え、京の文化を移植し、さらに長治二（一一〇五）年に中尊寺を創建した。以後、平泉はその子基衡（陸奥押領使、保元二〔一一五七〕年没）、秀衡（鎮守府将軍、文治三〔一一八七〕年没）までの三代の間、奥羽の政治・文化の中心をなした。文治五（一一八九）年に泰衡（秀衡の子）が源頼朝に滅ぼされた。

2一睡のうちにして　「一睡」は一眠りのあいだ。ごく短い時間。謡曲『邯鄲』で知られる中国故事の「邯鄲の夢」では、粟飯が炊き上がるわずかな時間に青年盧生が一眠りし、夢のなかで栄耀栄華をきわめるが、目覚めて夢であったことを知る。この故事から、栄華のはかなさをたとえて「一炊の夢」という。「一睡」は誤用だが、近世にはしばしばこのように表記された。

2大門の跡　「大門」は「（城や寺などの）表門、総門」。ここでは藤原氏三代の政庁のあった平泉館の大門の跡を指している。ただし芭蕉が見た大門の跡が何かは不明であり毛越寺の南大門跡とする説などがある。

2一里こなたにあり　平泉館とその大門との間が一里もあったことを表現したもので、その広大なさまに対して感嘆している。

2秀衡が跡　泰衡の居館であった伽羅御所の跡をさす。

3金鶏山　秀衡が居館の西に富士山に似せて築いた山で、山頂に黄金の鶏を埋めて、平泉を鎮護させたという。

3高館　源義経の居館があった所。中尊寺の南東八〇〇メートル余、平泉町平泉字柳御所にある小山の頂上に天和三（一六八三）年造営と伝えられる義経堂がある。

3南部　盛岡（現在の岩手県盛岡市付近）を中心とする南部地方。平泉の北方にあたる。江戸時代には盛岡藩（南部藩、藩主は南部氏）の領地。

4衣川　北上川の支流。中尊寺の裏、高館の北で北上川と合流する。歌枕。「袂より落つる涙はみちのくの衣川とぞいふべかりける」（「拾遺和歌集」恋二・よみ人知らず）、

謡曲「邯鄲」が作られ流布すると、我が国にこの故事を踏まえた表現や小説が出現する。（例）恋川春町「金々先生栄花夢」、芥川龍之介「黄粱夢」など。

問 **「高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。」（3行目）の部分には、どのような語句が省略されているか。**

答 「高館に登れば、北上川」見ゆ。この川は「南部より流るる大河なり。」の傍点で示したような語句が省略されている。

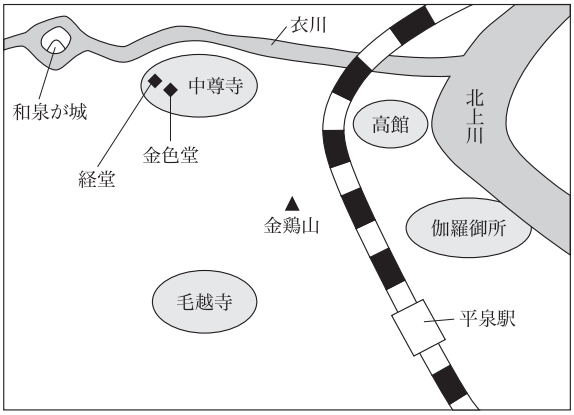
補 本来なら、二つに分けて表現するところを、芭蕉独特の圧縮した表現を用いている。最小限の言葉で表現する俳諧のあり方に通じる文章と言える。ねじれ文で、現在では悪文となるが、芭蕉をはじめ、西鶴などにもこのような文章が見られる。

問 **「さても」（6行目）以前と、それ以後「落とし侍りぬ」（10行目）までとでは、文章の内容や調子にどのような違いがあるか。**

答 第一段は平泉一帯の地を概観した様子を、簡潔で力強い文体で述べている。第二段は、平泉を見て得た感慨、つまり、自然の悠久さと人の営みのはかなさとを思う気持ちを、詠嘆的な調子で表現している。

補 転換の呼吸のすばらしさを味わわせたい。

問 **「草青みたり」（9行目）は、脚注に示した杜甫の詩句の、どこを踏まえた表現か。**



「涙をば衣川にぞながしつるふるきみやこをおもひ出でつつ」（「西行法師家集」）。

4 和泉が城　秀衡の三男、和泉三郎忠衡の居館で、中尊寺の北西一キロほどの所にあった。忠衡は、父秀衡の遺命に従い義経を守ったが、兄泰衡らに攻められて自害した。

4 泰衡らが旧跡　「泰衡」は秀衡の次男。源頼朝の命で義経主従を滅したが、後、頼朝に討たれた。泰衡の館の跡は、平泉館の南にあって、ここの文の内容とそぐわない。「秀衡が跡」「和泉が城」を含めた、藤原氏全体の居城の跡を、「泰衡らが旧跡」と大まかに言ったものと考えられる。

5 衣が関　高館の西方の古関と、中尊寺の北方二里の所の新関と二つあるが、「曽良旅日記」の名勝備忘録には「衣関、高館ノ後、切通シノヤウナル有リ。是也。南部海道也。ソバノ小キ土橋ヲ桜川ト云。」とあるので、ここは古関を指すと考えられる。

5 南部口　平泉から南部地方へ通ずる出入口。

7 義臣　正義・忠義の臣。義経の家臣に限らないという説もあるが、曽良の句に「兼房」とあることなどから、ここは義経の家臣のこと。高館最後の日、弁慶・鈴木兄弟・伊勢三郎など選り抜きの十余騎が一戦を試み、華々しく散ったと「義経記」巻八「衣川合戦の事」の中に見える。

8 国破れて……　杜甫「春望」の「国破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ」による。「城」の読み方には「じょう」と「しろ」の二説がある。「草青みたり」については古文の窓6「写本の本文―「青々たり」と「草青みたり」」の解説参照。

問　**杜甫の詩句の「草木深し」の一部を変えて、「草青みたり。」（9行目）として引用したのは、どのような効果があるか。**

答　引用文がそのまま地の文に流れ込む形となったため、読者は杜甫の詩の感慨から、芭蕉の感慨へとスムーズに移行することができ、作者の印象的実感を深く味わうことができるという効果を上げている。また、「青みたり」とすることで色彩が印象的になり、次の「夏草や」の句のイメージにつながっていく効果もある。

補　芭蕉が訪れたのは五月の夏。この季節の実感を入れ込んだのである。杜甫の詩をよく理解した上でなければ、このように一部を改変して自己の文章に組み入れることは難しいことに注意したい。

問　**「夏草や」（11行目）の句について、**
[中](1)**芭蕉は、今、どのような情景を見てこの句を詠んでいるのか。**
[中](2)**その場所では、かつてどのような光景が繰り広げられていたのか。**
[易](3)**「兵ども」とは、具体的にはどのような人たちか。**
[易](4)**「兵どもが夢」とは何を求める夢か、本文中の二字の熟語を二つあげよ。**

答　(1)夏草が一面に生い茂っている情景。(2)義経一党や藤原氏の一族が功名を夢見、栄華にふける光景。(3)義経主従や奥州藤原氏一族　(4)栄耀・功名

問　**「夏草や」（11行目）の句についてまとめた次の空欄を後掲の語句で補え。**

夏　草―［①］―悠　久―［②］
　⇔　　⇔　　⇔
兵ども―［③］―［④］―戦　争
　⇔　　⇔　　⇔
夢の跡―功　名―はかなさ―［むなしさ］

〔三代　感動　無常　自然　人間　平和　旧跡〕

答　①自然　②平和　③人間　④無常

問　**「卯の花に」（12行目）の句について、**
[易](1)**季語と季節を示せ。**
[中](2)**曽良は今、どのような情景を見てこの句を詠んでいるのか、色彩的な面も含めて説明せよ。**
[難](3)**その情景から、曽良はどのような光景を連想しているのか。**
[難](4)**「夏草や」（11行目）の句との共通点を、簡潔に答えよ。**

答　(1)季語＝卯の花　季節＝夏　(2)白い卯の花が一面に咲き乱れている情景。(3)義経の家来兼房が、白髪を振り乱して奮戦している光景。(4)眼前の自然の情景から一転、歴史に思いをはせている点。

問　**「かねて耳驚かしたる」（14行目）に込められた思いをはせている点。**

---

9 城春にして草青みたり　「して」は、逆接とした「国破れて」の「て」と対応しているとして、ここでは、順接（単純接続）の接続助詞とした。

10 涙を落とし侍りぬ　「侍り」文調を重々しくするための雅語的表現として用いているという説もあるが、ここでは、普通の丁寧語の補助動詞とする説に従った。

11 夏草や兵どもが夢の跡　季語は「夏草」で季節は夏。切れ字は「や」。句意は、「今となってはこの辺りは夏草が一面に生い茂っているだけだが、ここは昔、義経一党や藤原氏の一族が功名を夢み栄華にふけった跡である、だがそれも一場の夢と過ぎ去り、今は夏草だけが無心に茂っているばかりである」。平泉に至った芭蕉の心持ちは、この句に集約されていると言っていい。この句は、直接には「さても義臣すぐつて」以下の前文を受けている。しかし、旧跡に立って、眼前にある茫々たる夏草の茂りを見るにつけて、人生の無常を感じ、自然の悠久さにそれを対比させて感じ入っているのである。地の文と、句中の語との関連は、「栄耀一睡のうち」「功名一時」は「夢の跡」と、「田野」「叢」「草青みたり」は

れた、芭蕉の気持ちはどのようなものか。

答 中尊寺については、事前に調べてもいただろうし、また、それを拝観することの期待も大きかったであろう。その期待と、目の当たりにそれを見ることができる喜びの気持ちとが感じられる表現である。

補 白河の関・松島を訪れることを目的としていた芭蕉は、義経ゆかりの地であり、高い文化を誇った平泉も、その目的地の一つとして考えていたに違いない。

問 **「二堂」（14行目）とは、何と何か。**

答 経堂と光堂

●一〇四ページ

問 **「千歳の記念」（5行目）となる対象は、自然物・人工物のどちらか。**

答 人工物

問 **「しばらく」と「千歳」とはどう考えれば矛盾しないか、説明せよ。**

答 人の営みは自然の悠久に対してははかないものであり、その意味では、長い年月と捉えがちな「千歳」も「しばらく」という形容がふさわしい。

問 ◉**「しばらく」（5行目）と言ったのは、なぜか。**

答 無常の世の中では、絶対的に永遠なるものはない、特に自然の悠久に対しては、人の営みははかないものであるという考えが芭

「夏草」と、「秀衡」「泰衡」「義臣」は「兵ども」とそれぞれ対応すると考えられよう。地の文に示された感慨を巧みに句に盛り込み、地の文と句とが渾然一体となって、深い感動を盛り上げている、俳文独特の表現技巧を味わわせたい。

12 卯の花に兼房見ゆる白毛かな　季語は「卯の花」で季節は夏。切れ字は「かな」。「折から一面に咲き乱れている白い卯の花を眺めていると、その昔白髪を振り乱し奮戦して義経のために一命を落とした忠臣兼房の姿が浮かんできて、しみじみと昔のことがしのばれるよ」の意。「兼房」は、十郎権頭兼房。義経の北の方に仕え、共に奥州に下った。義経らの自害を見届けた後、敵の大将を道連れに壮絶な最期を遂げた。「義経記」巻七「判官北国落ちの事」には兼房のことを、「白髪まじりのもとどり引き乱し」と表現してある。

13 曽良　本名、河合惣五郎。芭蕉の信頼厚く、「鹿島紀行」の旅にも同行している。この旅では、「曽良旅日記」を記している。

14 二堂開帳す　「二堂」は経堂と光堂。「開帳」は、厨子の扉を開いて、その中に安置した仏像を一般大衆に拝ませること。「曽良旅日記」に「経堂ハ別当留主ニテ不開」とあり、経堂の開帳はなかったが、光堂については「別当案内」とある。

14 経堂　経文を納めておく堂。天仁元（一一〇八）年清衡が発願し十数年かけて完成させた。二階建てであったが建武四（一三三七）年上層焼失のため、後に修理した。「紺紙金泥一切経」などを納めてあり、現在は「経蔵」と呼ばれている。

●一〇四ページ

1 三将の像　「三将」は藤原清衡・基衡・秀衡のこと。経堂には本尊の文殊菩薩、脇士の優闐大王・善財童子が安置されていた。清衡・基衡・秀衡の像があったかどうかは不明。「曽良旅日記」によれば実際には経堂は開帳されず、芭蕉は経堂の中を見ていないと考えられる。

1 光堂　阿弥陀堂のことで、内外の壁に黒漆を塗り金箔を押し、柱や梁に螺鈿をちりばめるなどしているところから「金色堂、光堂」などと俗称されている。阿弥陀如来を本尊とするお堂で、現世で極楽浄土を具現するために荘厳華麗を極めた建築にした。

1 三代の棺　清衡・基衡・秀衡三代の遺骸を納めた棺。遺骸はミイラとなり残っている。

蕉の心の根底にあって、「千歳」（実際の千年ではなく長い年月の意）をも「しばらく」と言ったのである。

補 第一段落の城・館が全て失われて、叢になっていることを念頭に置いて、「しばらく」と表現したのである。

問 **「五月雨の」（6行目）の句について、**
(1)季語と季節を示せ。
(2)「降り残し」とは句中ではどういう意味か。
(3)句中で①自然、②人工物を示すものは、それぞれ何か。
(4)この句における「五月雨」の説明として、適切なものを次の中から選べ。
(ア)今降っている五月雨。
(イ)今降りやんだばかりの五月雨。
(ウ)今年降る五月雨。
(エ)毎年降る五月雨。

答 (1)季語＝五月雨　季節＝夏　(2)「語句の研究」参照。(3)①五月雨　②光堂　(4)(エ)

補 「語句の研究」参照。

2三尊の仏　本尊は阿弥陀如来、脇士が観世音菩薩・勢至菩薩。

2七宝　仏教における七つの宝物。経典によってその内容は異なる。

4四面新たに囲みて　光堂を覆う鞘堂は、正応元（一二八八）年、鎌倉七代将軍惟康親王が平貞時・宣時に命じて造らせたものなので、「新たに」とするのはおかしく、寛永年間（一六二四～一六四四）の後水尾院の勅命による修復のことを指すかとする説もあるが、「囲みて」を考えれば、鞘堂ができたときとするべきである。なお現在は、昭和四十三（一九六八）年の金色堂復原修理に合わせて、新たな鞘堂が作られたため、旧鞘堂は経蔵の隣に移され保存されている。

5千歳の記念　城も館も失われて叢となっている。にもかかわらず、同時期に建立された経堂・光堂は、滅びずに立派に残されている。本来廃れて叢となるべきところを覆いをして人為的に保存しているのである。芭蕉は「三将の像を残し」「三代の棺を納め」「三尊の仏を安置す」という人間の営みと、「風に破れ」「霜雪に朽ちて」という自然の浸食との対立を描きつつ、その奥に潜む自然と人為との対立・相克の相を見据えている。そして、風雪をしのいで残る眼前の光堂に対して、時の流れに耐えてきた人の営みへの感動を覚え、その恩恵に浴して「千歳の記念」の拝観ができることを素直に喜んでいる。その気持ちが「五月雨の…」という絶唱に結実したのである。

6五月雨の降り残してや光堂　季語は「五月雨」で季節は夏。切れ字は「や」。「激しい五月雨が毎年降るのでは、長い年月には何もかも朽ちてしまうだろう。ところが今日光堂に来てみると、千年も前の建物が、昔の豪華さをとどめて残っている。これはさすがに五月雨も、この光堂にだけは遠慮して降らなかったのであろうか」の意。「降り」には「古り」を掛け、「光堂」には「光り輝く」意を寓していると考えられる。なお、ここでの「や」は疑問の意を表すが詠嘆の意も込められている。この句については、「現在五月雨が降っているが、光堂の所だけは降り残している感じで、明るく輝いている」という実感の句とする見方もあるが、曽良本「おくのほそ道」に、この句が「五月雨や年々降りて五百たび」とあることや、「曽良旅日記」によれば、当日は晴れていたことなどから「降り残して」を空間的な意味にとらず、時間的な意味にとるのが現在では普通である。

鑑賞

「おくのほそ道」の旅は、一面では義経伝説への旅でもある。奥州は義経伝説の宝庫で、柳田國男の研究によって、「義経記」が東北地方根生いの文学であって、東北地方の人々にとって、義経と彼に従って奮戦した勇士たちの物語は、家の祖先の英雄譚として語り継がれた様子が明らかにされている（「東北文学の研究」など）。こうした義経伝説は、「平家物語」「義経記」やそれを素材とした謡曲・浄瑠璃・幸若舞曲などによって、中世・近世を通して国民文学と言うべき位置を占めていた。芭蕉は、白河の関を越えてから佐藤庄司の旧跡を訪ね、和泉三郎寄進の塩竈社頭の宝灯を見、塩竈ではさらに奥浄瑠璃を聞くなど、各地に義経主従の歴史の跡を訪問した。そうした中で培われてきた「判官びいき」の心情が、ここ平泉で一挙に噴き出し、感動の頂点に立ったのである。

「おくのほそ道」の旅程は、江戸を起点に太平洋側を北上、平泉を北端として日本海側に抜けて南下というコースで、いわば平泉は地理的にも頂点に位置する。また、景観の妙を詠嘆する松島・象潟に挟まれてもいて、重要な位置を占めることは間違いない。

本段では歴史と美術を通して、人間のはかなさを詠嘆的に述べている。旅立ちで流された離別の涙が、世の無常を観じて、高館の土の上に流されたのである。多情多感な詩人としての芭蕉の真髄が発揮されていると言えよう。第一段は、高館に立って眺めた藤原氏の遺跡平泉と、義経主従の最期の往時をしのび、その感慨を、簡潔な表現の中に極めて印象深く述べている。まず「三代の栄耀一睡のうちにして」と人間のもろさ、はかなさを端的に記し、次いで「金鶏山のみ形を残す」「国破れて山河あり」と自然の悠久さを実感を込めて詠嘆的に述べ、その感慨を集約する形で「夏草や」の句に続けている。この句は、歌枕を離れて、歴史と現実とを巧みに詠み込み、しかもそこに自己の心情をも織り込んでいる点で画期的な句であった。第二段においてもやはり、歴史と自然とを対比して把握しているが、光堂が五百年来の風雪に耐えて昔の姿をとどめていることに深く感動し、その結晶が「五月雨の」の句となったのである。理屈っぽく観念的な句とも評されるが、「三代の栄耀」も夢と消えて、「兵どもが夢の跡」となった遺跡に残る光堂に対する感動を見事に詠んでいると言ってよかろう。